［小特集］　口承文芸の現在――世界

●ドイツ

現代における昔話の語り

間宮史子

ドイツにおいては、伝統的な昔話の伝承は絶えたといわれているが、逆に昔話をめぐる状況は活気を帯びている。ここでは、そのような活動や状況について、私の体験も踏まえて報告したい。

一　ヨーロッパメルヒェン協会の活動

ヨーロッパメルヒェン協会[註1]（Europäische Märchengesellschaft e. V.）は、「昔話を保存し、昔話への現代人の意識を改めて高めるという課題に貢献する」ために、一九五六年にライン河畔のベントラーゲ城で創立された。昔話に関わるさまざまな年齢、職業の人々の集まりで、約二二〇〇人の会員（一九九六年現在）を擁する。協会は特に、「語り手」の果たす役割を重視しており、以下のような活動を行っている。

昔話の語りを習いたい人のための種々のセミナーの開催。これは、次に述べる語り手の養成とも連動している。セミナーは、その重点とするところにより、次の四つに分かれる。

①研究セミナー。講師に昔話研究者を迎え、昔話の専門知識を学ぶ。

②語りセミナー。協会の語り手の指導のもと、昔話の語りを学ぶ。

③瞑想セミナー。語りを生き生きとさせるための、イマジネーションの訓練などを学ぶ。

④創造セミナー。「昔話と子ども」という視点から、遊び、音楽、踊り、人形劇、工作などに昔話をとりいれることを学ぶ。

これらのセミナーは、週末（原則として金曜日の一六時～日曜日の一三時）に開催され、一セミナーの受講料は平均して一〇〇マルク（約七〇〇〇円、宿泊代は別）、これは協会会員用だが、非会員でも四〇マルク（約二八〇〇円）を余計に支払えば、受講することができる。私が協会から最近取り寄せたパンフレットには、一九九八年中にドイツ全土で開催される五六のセミナーの案内が載っている。

語り手の養成及び認定。ヨーロッパメルヒェン協会には、語り手を紹介してほしいという問い合わせが年平均一五〇通来るという。そこで、協会は語り手を養成し、その認定を行う。協会の資料によ

ると、語り手養成の実際は次のようなものである。受講者は、基礎セミナーを修了後、いくつかの上級セミナーを受講する。この上級セミナーは、指導者と一二～一六人の受講者で成る。続いて、受講者四人での集中セミナーがあり、指導者との話し合いの後、自身で「十分習熟した」と判断したら、修了審査としての公共の場での語りを行う。そして、これが肯定的な評価を受ければ、修了・認定となる。

協会が定めている語り手の認定基準は、次の六つである。

①伝承昔話を語れること。単に暗記して文字どおりに語ることはないが、最初は話のテクスト尊重。

②人類の精神的遺産を再現する芸術家であること。

③個々人の表現力の可能性によって、伝承話を解釈すること。これはしかし、昔話そのものを個人の能力より重要と考えるため、芝居がかった演技とは区別される。

④以下のことを見分けられること――伝承昔話と創作童話、完全な昔話と断片的な昔話、再話と翻訳の良し悪し。自身のことばで語ろうとする者は、ことばの才能をもっていること。これらは、子どもに話を語っている親、幼稚園や学校の先生にはすべてあてはまらなくともよい。

⑤比較的大きな語りの場でも、その語りがよく聞きとれること。それには、声の訓練、様々な語りの場に関するコンセプトの所有と熟達、聞き手の年齢による昔話の選択、語りの機会の熟考が必要となる。

⑥語り手養成講座修了前に提出するもの――習得した昔話のレパートリー、それ迄に行った語りの実践の決まった回数、勉強した研究書・参考文献のリスト。

ヨーロッパメルヒェン協会が、体系的に語り手の養成とその認定を行っていることがわかる。しかし、これに対しては批判や疑問も存在する。たとえば小澤俊夫は、「本の文章の点検なしに、本になっている昔話なら何でもいい、それを覚えて昔話を語るということが行われている。読むと分かるかもしれないけれど、耳で聞くと分からないような物語が語られてしまう。そのために子どもには分からず大人にしか分からない」[註2]と述べている。また、私がテュービンゲン大学経験文化学研究所のゼミナールで知り合った年配の女性は、協会の語りセミナーに参加したことがあるが、息継ぎの仕方まで規定された語りを習う必要があるのかという疑問を口にしていた。

協会に認定された語り手は、「語り手のリスト」に載せられ、それぞれの居住地域で紹介されるが、常時の仲介は協会に期待できない。また、催しなどでの語りの報酬については、かなり違いがあるので、個別に交渉のこととなっている。

また協会は、春の研究集会、秋の国際大会という年二回の大会を開催し、大会の学問的成果を刊行するための出版活動も行っている。

二　ヴァルター・カーン・メルヒェン財団

ヴァルター・カーン・メルヒェン財団（Märchen-Stiftung Walter Kahn）の活動について、簡単に説明しておく。これは、旅行業者ヴァルター・カーン氏（一九一一～）が設立した財団で、昔話

研究を奨励し、ヨーロッパメルヒェン協会を後援している。財団から入手した資料(註3)によると、一九八五年に財団として認定され、財団資本は七三万マルク（約五千百万円）だそうだ。

活動の内容は、以下のようなものである。ヨーロッパメルヒェン協会の大会への援助。各地での「昔話の催し」開催のための組織援助、そのための時間の流れに沿った手筈の整え方がリストで示されている。機関誌『メルヒェンシュピーゲル（Märchenspiegel、昔話の鏡）』の発行—この機関誌は年四回発行され、ドイツ語圏のみならずヨーロッパの昔話研究、語りの実践に関する研究、書評、新刊紹介、ヨーロッパメルヒェン協会のセミナーの開催のお知らせなどが掲載される。昔話及び昔話の語りに関する研究書や小冊子の刊行といった出版活動。そして年一回の奨励賞の授与。①昔話賞（Märchenpreis）—昔話の芸術あるいは学問領域に携わる個人及び機関に授与され、賞金は一万マルク（約七〇万円）。②ルッツ・レーリヒ賞（Lutz-Röhrich-Preis）—口承文芸研究、昔話研究の分野において、ドイツ語で書かれたその年の最良の学位論文に授与され、賞金は五千マルク（約三五万円）。フライブルク大学で教鞭をとった著名な口承文芸研究者ルッツ・レーリヒの名前が冠されている。

三　昔話の語りの場

ここでは、私がドイツ南西部バーデン・ヴュルテンベルク州のテュービンゲン大学に留学していたときに（一九九〇～一九九三）体験したことを中心に、実際の昔話の語りの場について報告したいと思う。

幼稚園や学校での昔話の語りについては、ときどき耳にしていたが、そんなとき、同じバーデン・ヴュルテンベルク州のオーベルンドルフという町の、あるカトリック幼稚園を訪ねる機会に恵まれた。残念ながら、子どもたちはすでに帰った後で、先生に話を聞くことしかできなかったが、この幼稚園では、先生が昔話を語って聞かせる際に、子どもたちの輪の中心にロウソクを一本立てているということだった。部屋の壁には、子どもたちが描いた「おいしいおかゆ（グリム童話集一〇三番）」の絵が張ってあった。

幼稚園や学校以外での昔話の語りの場というと、博物館や、町の書店や玩具店などがあげられる。博物館における昔話の語りを聞く機会は私にはなかったが、折りに触れて、バーデン・ヴュルテンベルクの州都であるシュトゥットガルトやテュービンゲン近郊の町の博物館での催しとして、「おはなしの時間」がもうけられているのをパンフレットやポスター上に見つけたものである。

テュービンゲンの比較的大きなある書店で、大人のための昔話の語りの夕べが開かれたことがある。この夕べは、『シュヴァーベン地方の昔話』の出版を記念して開催されたもので、書店の顧客に招待券が配られた。私はたまたま、ドイツ人の知人からその招待券を譲り受け参加した。聞き手は約七〇～八〇名。昔話を語ったのは、ヨーロッパメルヒェン協会の語り手でもある、ジークリッド・フリューさんだった。彼女は、協会で昔話についてのセミナーをもち、学校、図書館、様々な教育機関で語るそうだ。フィッシャー社の『世界のメルヒェン』シリーズのうち、九冊の昔話集の編者として

も知られる。この晩は二話を語った。一話めは、標準ドイツ語だったが（木馬のなかに隠れた若者が王女のところへ運ばれる話だったと思う）、二話めは、シュヴァーベン方言だったので、これは私には全くわからなかった。それでも私は、その場に居合わせた人々と昔話の語りの時間を共有し楽しむことができた。ただし、残念だったのは、語り手と聞き手の位置がよくなかったこと。というのは、その書店の建物の構造上の理由で、語り手は階段の踊り場に立ち、階下に並べた椅子に座っている聞き手を見下ろすような形になってしまったからだ。

ドイツの家庭における昔話の語りは、決して活発とはいえない。ここでは、ひとつの例として、私の義母の古くからの友人である女性の場合について述べる。彼女は、自分の子どもや孫が五歳になるまで昔話を語り聞かせてきた。彼女の考えによれば、五歳までの子どもは読み聞かせにはまだ小さすぎるからである。これに対して、五～八歳の子どもは読み聞かせに適しており、彼らが自分で本を読む気にさせることも大切だ。私の書面による質問に彼女が答えてくれたことによると、子どもの誕生日のお祝いにも昔話を語ることがあったという。眠りにつくときには、子どもたちはいつも「星の銀貨（グリム童話集一五三番）」を語ってくれとねだったそうだ。彼女が語った昔話は、「狼と七匹の子山羊（同五番）」「ラプンツェル（同一〇番）」「ヘンゼルとグレーテル（同一五番）」「灰かぶり（同二一番）」「赤ずきん（同二六番）」「いばら姫（同五〇番）」「白雪姫（同五三番）」「長靴をはいた牡猫（同初版三三番、第二版以降削除）」などで、一般によく知られたグリム童話が多いが、ときにはヴィルヘルム・ハウフ（一八〇二～一八二七）の創作童話である「小さなムック」や「こびとの鼻吉」も語ったし、絵本の語りあるいは読み聞かせもしたそうだ。現在は、三、四番目の孫がまだ小さすぎるので、語る機会はないというが、この孫たちがもう少し大きくなれば、彼女はまた語るつもりだ。

私がとても興味をひかれたのは、彼女が「赤ずきん」を語る際に、全くグリムのテクスト通りではなく小さな変更を行った、ということである。彼女の「赤ずきん」では、赤ずきんがお婆さんにケーキとともに持っていくのはワインではなくジュースであり、森で赤ずきんは、花だけではなく木の実やキノコを摘む。ジュースへの変更については、彼女の居住地域には以前はワインがなかったので、子どもたちにはジュースの方がわかりやすかったと説明している。彼女は、小さな子どもに語るときには、語り手が自分で多少変えたり付け加えたりできる、しかし、話の内容だけは変えてはいけない、と考えているのだ。

四　昔話を語ること

以上、ドイツにおける昔話の語りの状況について、いくつか報告してきた。折りしも、伝統的な昔話の伝承は絶えたといわれる現代にあって、昔話を語ろう、あるいは昔話の語りを習おうという人びとがあらわれ、それが活況を呈しているのである。ヨーロッパメルヒェン協会のリンデ・クノッホは、「特に現代においては、直接人びとに語りかけられることばはひとつの神秘的な力だ」と指摘して

いる。[註4] テュービンゲン大学のヘルマン・バウジンガーの「日常の語り」ゼミナールにおいても、「現代の昔話の語り」がとり扱われ、昔話を語ることの価値の再発見だととらえられた。[註5] このような状況は、ひとりドイツだけのものではない。果たしてここから、新しい昔話の伝承・伝承者が生成されていくのだろうか。

註

(1) ヨーロッパメルヒェン協会については、すでに以下の報告がある。
竹原威滋「ドイツにおける説話研究の動向」『説話の始原・変容』説話・伝承学会　桜楓社　一九八八年、小澤俊夫「国際研究集会の報告」『口承文藝研究』第十三号　日本口承文芸学会　一九九〇年、高野享子「ドイツでの語りの新事情」『語りの世界』第十六号　語り手たちの会　一九九二年

(2) 小澤俊夫・吉川周平・中川裕・兵藤裕己（司会　川田順造）「口承文芸研究の課題」『口承文藝研究』第二十号　日本口承文芸学会　一九九七年、三〇頁。

(3) Märchen-Stiftung Walter Kahn (ed.): Umgang mit Märchen. Bad Bayersoien 1996, Märchen in Museen. Bad Bayersoien 1998.

(4) Knoch, Linde: Märchenerzählen lernen bei der Europäischen Märchengesellchaft (EMG). In: Märchenspiegel 3／97 (8 Jg.) 1997.

(5) 間宮史子「ドイツ、テュービンゲンにおける口承文芸研究――バウジンガーの『日常の語り』――」『口承文藝研究』第十九号　日本口承文芸学会　一九九六年、参照。

付記　本稿は、日本口承文芸学会第二二回大会シンポジウム「伝承者の現在」において報告したものをもとに加筆修正したものである。

（まみや・ふみこ／白百合女子大学非常勤講師）